

小千谷 東忠あて大亦観風書簡 三 A Collected Transcriptions of OMATA Kampu's letters to Tochu, Ojiya, Niigata III

キーワード…大亦観風、日本画、小千谷、パトロネージ、歴史画、万葉集

解題

一九四二年、大亦観風と東平三郎をめぐるひとびと

今回翻刻の一九四二年（昭和一七）三月から年末にかけての大亦観風書簡について、主な内容を見ておく。前々年四〇年の第四回個展万葉集画撰展に向け、東忠主人東平三郎を中心とする、小千谷のひとびとと、観風の交友は深まっていた。その後、小千谷でも観風の通信添削を受ける趣味の絵の会「洗心会」結成のはなしが持ち上がる。なお、後述するように、この四二年八月には、東京の観風主宰の画悠会が湯沢行を計画実施したが、その湯沢には洗心会の会員となってもらおうとしていた小千谷の名士たちが平三郎の誘いを受けて合流し、交流している。

前回、本誌第五号所載「小千谷 東忠あて大亦観風書簡 二」では四二年二月一五日付の書簡38までを翻刻紹介したが、38に同封されていた写真を掲載し忘れたため、ここに掲げておく（図1）。写真は観風主宰の画悠会新年会の際のもので、床の間のある和室で、観風とその妻子、画悠会会員たちが写っている。写真裏には「昭和十七年二月一日／新春錬筆会／於大逸荘画房／画心悠遊会／同遊／当日降雪数寸、欠席者数名アリシモ幸ヒ良酒ヲ得、雪宴下大ヒニ揮フ／大亦観風／呈東平三郎様」との書き込みが

ある。

さて、今回掲載の書簡の主だったところを紹介しておく。まず、39は湯沢の高半旅館で湯治中の平三郎あて。「三十日夜」とあり、封筒裏には「三月三十一日」と記すが、消印ははがれた切手にかかっていたため年は不明である。しかし、前号で掲載の38（二月一五日）に「三月中頃、湯沢へお出での由です」とあって、続けて「中旬過ぎは一寸忙しくなるかもしれません、一、二日位どうかして御見舞旁々お伺ひいたします」とあり、この39の冒頭には「今夕無事帰京いた



図1 書簡38に同封の1942年1月画悠会新年会写真

福田 道宏
FUKUDA Michihiro
奥村 一郎
OKUMURA Ichiro
高村 佳子
TAKAMURA Keiko

しました。此度は又、大変御厄介をおかけしまして」とあるので、四二年三月三〇日までに、何日間か不明だが小千谷を訪ねたものらしい。主な内容は滞在中と持たされた土産の礼のほかに、観風が東京で主宰する画悠会をモデルに、小千谷で立ち上げようとしていた洗心会の会規や会の在り方である。参考までに東京の会の印刷物などを同封するとあり、それらは40とし、〈1〉から〈4〉の枝番を振った。〈1〉は〈4〉と同じ印刷物の紙背に観風が手書きで記したものの、同じく〈2〉は今回略した〈4〉の左端、印刷された「画悠会名簿」の上から記入例を観風が記したものである。〈2〉のもとから印刷の部分は、今回は便宜上、文字色、罫線などをグレーにしてある。なお、39で〈4〉を指して、「この印刷物の代表者は（渋谷君は）東京府会課長で、こんど、代議士になる」と書かれた渋谷鶴松だが、前回（本誌創刊号所載「小千谷 東忠あて大亦観風書簡 一」）で翻刻紹介の三八年一月二一日付の書簡2にも、同封した驪山画悠会新年会集合写真の解説のなかで「府会議員」と書かれたものと同じか。三二年六月の府会議員選挙で荏原郡選出で当選、三六年・四〇年にも目黒区選出で当選しているが、代議士については不明。このあと45によれば、四二年八月の驪山画悠会の湯沢旅行にも妻同伴で参加している。また顧問として名を連ねた「豪洲プリズベン大学教授 清田龍之助」はやはりさきに述べた、前々回翻刻の書簡2で「西洋人のやうなのが、親友で東京商科大学の教授、こんどオーストラリアの大学の教授にゆきます」と書かれるのがそれだろう。清田については国立国会図書館に三冊の著書・訳書があるほか、現在、三鷹市山本有三記念館となっている旧山本有三邸の施主としての研究がある。それらによれば広島忠海の生まれ、東京育ち、米国ケニオン大学・エール大学大学院を出て、日本電報通信社に勤務のち立教大学・東京高等商業学校で教鞭をとった。その後実業界に転じ、さらに再び東京商科大学予科講師となり、三八年オーストラリア政府の要請で外務省から推薦されてクイーンズランド大学に赴任した、という異色の経歴の持ち主である。なお、四一年真珠湾攻撃により日米開戦で敵国人として逮捕抑留されて、翌年十月に帰国、四三年に没したという。書簡2に同封の写真はまさに渡豪の直前であった。

41は第一回大東南宗院展覧会に観風が出品した「万葉集親母行旅の子を憶ふ歌」の絵はがきに書かれたもの。本文中で「例の御義理の「出品」、この様なもの」と書くのは、この大東南宗院展への出品のことだろう。さ

きにふれた三八年一月二一日付の書簡2のなかで、「自分の画は自分で展覧会を開いて、一般及び美術界の批評を問ふ」と、群れない事を宣言しており、団体展への出品に一抹の引け目があったの表現かもしれない。「御心配いたゞき候作品」は、これ以前に平三郎の紹介で予約を受けた作品であろう。小千谷の洗心会はいまだまとまらなかったものか、自分が小千谷にいる間でなければ、進展しないのだろうかと言っており、なかなか発足にはこぎつけられなかったようである。

四二年七月四日付の42は、冒頭、平三郎が選挙に出馬して当選したことを祝し、「応援演説は私の思ひ違ひから果し得ませんでした」と記し、本来、平三郎の応援演説を観風が行う予定だったようで、小千谷に出向いたが演説が予定されていた日か投票日間に間に合わなかったようである。「圧倒的最高点」での当選というが、「翼賛選挙」で名高い同年四月の第二一回衆議院議員選挙では時期が合わず、また平三郎が当選してもないので、六月か七月はじめに県会か小千谷町会かの議員選挙があったものか。

平三郎あて書簡で全期間を通じて頻出する「小出」という人物が選挙活動で奮闘し、功績大だったものと見え、平三郎は小千谷から東京に帰る観風に、記念の作品を依頼し、観風は有名な小千谷の牛の角突きを描く《闘牛の図》を画料不要で描くと約している。この小出だが前々回翻刻の三九年九月二八日付の書簡8に、「平三郎からの」御便りによると小出氏、店を売却して渋谷へ引込んだ由、どういふわけかナと思ひますね。「略」私の方へは小出君の引越通知はありません」と書き、同年一二月二一日付の書簡13には「銀座にゐた小出君より突然、てんぷらや開店の通知有之。当日早速喜び旁々試食に参り候。中々こった店に御座候。元カフエの跡とかを改造せし為、一万ほどかゝりし由。何にしても銀座のこととて相当高くも売る事だから当れば大成功と存候。『略』やはり清月と申居候」とあり、同一人なら東京在住である。翌四〇年一月二六日付の書簡16でも「清月のてんぷらを紹介旁々、友人を連れて銀座へ参り候。中々よくはやり居候」とある。渋谷への転居は住所のことで、銀座の店はいったん閉めて、別の場所で天ぷら屋として、以前と同じ清月の屋号で再開業したものようである。また、四〇年の第四回個展万葉集画撰展に平三郎を通じて後援を頼む小千谷人脈のなかにも「小出」が含まれており委細は未詳である。

後半は東京の画悠会の湯沢旅行についてで、そこに小千谷の洗心会会員に合流してほしいとの相談が記されるが、湯沢行については後述する。



図2 大亦観風・画悠会会員、東平三郎らと湯沢高半にて

43には「展覧会を和か山商工会議所のすゝめにより催し」とあるが、詳細は不明。生まれ育った故郷和歌山であるが、和歌山も大阪も「病気になる程暑くて閉口しました」と書く。本文でも「別紙のような八月八日、九日の湯沢行の印刷物」と記すガリ版刷の「画悠会湯沢旅行予告状」・および「七月三十日付画悠会湯沢旅行案内状」(44・45)を同封している。

まず、44は「画悠会幹事 岩村博・窪田宇佐美」から会員あてに出された旅行の案内状。八月七日の夜行で東京を立ち、八日・九日の一泊二日で越後湯沢の湯沢温泉の高半旅館に滞在するというものである。日付はないが観風の和歌山の展覧会があるため「例会は取りやめ」と記し、40(3)によれば画悠会の例会は毎月第二日曜日の午後であり、四二年七月の第二日曜日は一二日にあたるので、それ以前、月の前半より前なのは確実である。

45は44と同じく画悠会幹事岩村・窪田から参加者向けに七月三〇日付で刷られた案内状で旅行の概要が具体的にわかる。結局、観風夫妻と長男、先述の渋谷夫妻のほか、伊藤・垣上・中川・阿部と幹事の二名で計十一名となったらしい。八月七日二時三〇分発の新潟行きの夜行終列車に乗るため二時三〇分から二時までの間に上野駅改札に集合、一時間半も早く集合するのは「この頃の夜行列車は何れも一時間から一時間半位前から改札に行列してゐないとまとまって良い席を占めることが出来ませんから少し御辛棒下さい」とその理由が書かれている。翌八日五時一五分に上越線越後湯沢駅着といい、鉄道料金は三円九〇銭で、「省線のどこからでも」というが、これは恐らく、鉄道省の線(国鉄)のどこからでもということ

ではなく、山手線が都区内のどこからでもということだろう。参加者はこの行きの運賃をのぞき、多めに見積もって五〇円ほど持参するように言われている。

さて、旅行先の「高半旅館」だが、現在も湯沢温泉に「雪国の宿高半」がある。「雪国の宿」とは「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」のフレーズで有名な川端康成「雪国」がここで執筆されたからであり、そもそも湯沢の温泉そのものが「高半」の名のもとになった高橋半六が偶然この地で見つけたのが起こりだという老舗中の老舗である。

44でも「若主人は東京で教育を受けた人、絵に興味を持ってゐます」と書かれるが、川端以外にも多数の文人墨客が訪れた。二〇〇四年、奈良県立万葉文化館での展覧会⁴の際、この書簡や高半での集合写真(図2)から当代に連絡して伺ったところ、観風作品《太宰府梅花の宴》一幅をご所蔵だということがわかり、ご出品いただいた。なお、近時入手した、この高半の古いパンフレットを挿図で示す(図3)。

なお、44・45に画悠会幹事として名の挙がる岩村博・窪田宇佐美だが、前者は四一年から四二年に赤羽尋常小学校(現港区立)校長を務めた人物、後者は二六年から三一年荏原郡旭尋常小学校(現世田谷区立)初代校長を務めたのち源氏前尋常小学校・伊藤尋常小学校(ともに現品川区立)の校長を歴任した人物と同名であるが、同一人か。もし同一だとすればいつから幹事なのか、どのような経緯で観風と出会ったかなど委細不明。ひとつ言えることは、観風が住んだ目黒と比較的近い方面に勤務校があることで、



図3 高半旅館パンフレット

地縁によるものかもしれない。

46は画悠会湯沢旅行出発直前の八月五日付である。43から45に対して、平三郎から返事があったもようで、湯沢に持参して納めるつもり、平三郎を通じての作品七件について、依頼者の名と画題、進捗状況が列挙される。

47は二枚あり、46に同封されていたが、小千谷の表具屋と長岡の指物師の領収書であり、観風が封入したのではなく、届いた書簡に平三郎が入れておいたものだろう。日付は八月六日、七日で湯沢行の直前にあたり、46に書かれた作品の表具と箱についてか。前者はメモ書きのようなもので、手書きで表具十八円とあり、あて名は「上」となっている。後者は印刷された用紙に手書きで、あて名は「小千谷町東忠」である。内訳は、桐の柾目の中品で、長さ二尺九寸の「掛物箱」の蓋板が三枚（各四円）、同じく二尺一寸の蓋板一枚（三円）の計四点で一五円という。物価がわかり興味深い。

48は封筒がなく、年月未詳。湯沢には観風も複数回行っているようだが、お土産の梨から考えて、四二年八月の画悠会の旅行直後の書簡と推測できる。予定通り八月八日・九日に画悠会会員たちと湯沢へ行き、そこへ平三郎らが小千谷から合流して交流したようである。「帰ってみると、家内がもう出発してゐた」とあるので、「夜更けにもかゝらず、御二人にて御送りを頂き」ともあり、湯沢には妻佐和子も行き、そこからほかの者とは別行動で観風ひとり小千谷にも行ったものかもしれない。小千谷からの参加者は、「山本氏」・「松月君」などが登場するが、後者は松月堂喜三兵衛の主人だろう。「死んだお父さん」ともあるので、亡くなった先代から知っていて、ここに現われるのは二〇〇四年の万葉文化館での展覧会の際、作品を拝借した松月堂社長の池安三氏か。「皆様を御招きして頂いて」とあるので、この二人以外にも小千谷からの参会者があったのではないかとと思われる。こうした宴会や小千谷からの招待などの経費は平三郎持ちだったものか、「大層御散財をかけた事を恐縮に存じます」と書いている。後半はこの湯沢滞在中に平三郎から割れた食器の接着剤について相談を受けたよう、それを別送すると述べている。

49でも湯沢行の感謝を述べ、九月二〇日に開かれた画悠会でも思い出話を語ったという。また、湯沢で平三郎から一〇月頃に平三郎の子息が上京することを聞かされたよう、時期が合えば自分も出品する「南宗名家展」（一〇月二四日）十一月一日、東横デパート）を見てほしいと書く。ここ

に出品する二十名を列挙するが、小室翠雲ら南画家がほとんどだが、そこに池田遥邨・河野通勢が入っているのが興味深い。

50はその「名家展」、つまり「南宗名家新作日本画展覧会」に観風が出品した《神威伏敵（将軍地蔵尊）》の絵葉書である。会場は「於東京渋谷東横百貨店」と刷られており、前便で触れていたものがこれである。本文には「斎藤様夫人」が来て、「御令妹」の「ケイコ」、つまり稽古について依頼されたといい、共通の知り合い斎藤なる人物の妹が絵を習いに来ることになったらしい。

つづく51は、「京都高雄橋」絵はがきで、十一月一六日から小室翠雲の京都行を追いかけて、京都に行き、関東よりも美しさひとしおの嵐山・高雄の紅葉を堪能した旨、記される。ただし、旅先京都から送ったものではなく、消印も目黒で二日の帰京後、二三日付である。

この四二年最後の52は暮れも押し迫った一二月二七日付である。正月用の鮭を贈られて、その礼状である。ほかに、平三郎を介しての依頼画について、書かれており、「上新氏」なる人物に納めるつもりで制作した作品を結局、平三郎が引き取るようになったらしい。これについては46に「上新中村實氏」があり、受領書を持参すると述べているが、話がまとまらず、平三郎が小切手で二百円送ってくれたようである。本来受け取るべきではないが、厚意なので有難く頂戴すると書く。それとは別に「石坂氏」の依頼についても引き続き仲介を頼んでいる。50で出てきた斎藤なる人物の妹の稽古だが、「斎藤さん他二人の婦人」には月三回、画悠会とは別に指導を行っている述べ、そのうちのひとりと考えられる「益子さん」は姓か名かは不明だが、月末に「帰る」ようだと書いており、小千谷の女性らしい。また、小千谷の洗心会も湯沢での交流がきっかけか、活動を始めたようである。「画筆二本宛（大小）七人分」を買い送るよう平三郎から頼まれたらしく、ここから洗心会が七人程度の会員を得ていたこともわかる。年明け一月には平三郎が息子を訪ねて上京すると知らされたようで、「こんどは宿などへは行かないで」観風宅に来るように勧めている。熱海へでも一緒に行くとも書く。実現したかどうかは、続く書簡が四三年二月のため不明だが、この平三郎の最晩年の交友は単なるパトロンと美術家の枠を超えて、親しい友人か家族のようである。なお、本誌は本号を以て終刊となるようなので、以下、のこる四三年の書簡・はがきと戦後の四五年、平三郎亡き後、平三郎の妻ひなにあてたはがきは、別の機会に紹介することに

する。

(福田道宏)

注

1 平山育男「旧山本有三郎施主であった清田龍之助について」『日本建築学会計画系論文集』第七三巻第六二九号、二〇〇八年七月、一六二五～一六三〇頁。

2 前掲注「旧山本有三郎施主であった清田龍之助について」による。

3 「雪国の宿高半」ホームページ (<http://www.takahan.co.jp>)。

4 二〇〇四年一〇月二三日～一月二八日、奈良県立万葉文化館開館三周年記念特別展「万葉を描いた画家大亦観風展―生誕一一〇年―」。

凡例

一、掲載順は年代順とし、不明のものは内容などをもとに推定し配列した。
二、かな遣い等は原文のままとしたが、旧字等は現在通用のものに改め、句読点を補った。また、誤字・当て字や、意味の取りづらい箇所については、当該箇所の右傍の「」内に正しい字やふりがなを補った。
三、不適当と思われる表現も、当時の時代状況を考える上で貴重なものと考え、原文のままとした。

四、個人情報にかかわる、公刊に不適切な箇所は一部略してある。
五、書簡の翻刻は福田・奥村が行い、高村・福田が校訂を行った。

翻刻―一九四二年三月から一二月―

一九四二年(昭和一七)

39 三月三十一日付

拝啓。今夕無事帰京いたしました。此度は又、大変御厄介をおかけしました恐縮です。又、いろいろと御配慮厚く御礼申上ます。頂戴いたしました御土産で又、例の如く家内中、大変な喜び方、子供達もとび上ってゐる有様です。御礼の申上様ありません。

さて、洗心会の方、前の東京の会規を同封、同時に新しい会規も書き直してみましたから桜木氏と御相談、小千谷に合ふ様に御取捨被下い。どうも、中心が東京だとだれ易い傾向が、きつと起りますから、どうしても毎月集会して(いろ／＼趣向をかへて)、ジマン会をする必要があります。

又、始めに会員の質を低くすると、どうしても低いものになる傾きがあります。画悠会^{〔会費〕}は会^{〔会費〕}が安すぎたと思つてゐます。之では何も会の仕事が出来ないから(一切、私には金の関係はないのですが)。東京でも経験上。(たとへば安い家賃で長屋式の家へは上流の人が這入らない。やがて近所が一体に低級になってしまふのが例です。又、会費の安い宴会へは高級の人が来ないのも事実ですから)。斯ういふ処を参考にされて、高級な、上品な会を作られたら如何。人数は十人位で結構でせう。

それから別に先年、東京の会で雑誌発行の話が持上つた際の印刷物がありますから、参考に御送りします(之は御宅へ)。五、六枚同封いたします。之を同時に配布して下さいしても結構です。それに名簿欄がありますから、入会者は之に必ず名簿を持寄り幹事の方に保存(若しくは参考の為、又名前を知る為に東京へ送つて下すつたら尚結構です。指導上、その人の年配、職業、趣味(摘要ランに)等を記載してもらへば、よく解つて非常によいと思ひますから)。この印刷物の代表者は(渋谷君は)東京府会課長で、こんど、代議士に出るのですが、洗心会も顧問の氏名をも並べて立派な方が尚よいのではありませんか。その辺、しかるべく御考へ被下つたら如何。西脇様にも御相談下すつたらと思ひます。

次にこの度、御配慮頂きました作品の方、尚よろしく御願申上ます。この程伺つた以外にお出来の様でしたら、又御通信願上ます。

御入湯中、どうか御自愛御願申上ます。西新さんも御出ででしたら、よろしく御願ひ申上ます。

この程、奥様御風邪の処を御厄介をかけまして恐縮でした。では先づ帰京御挨拶旁々御礼まで。草々。

三十日夜

大亦観風

東平三郎様 侍史

〔封筒、消印〕 1「一字欠」

越後湯沢温泉(上越線)

高半旅館内滞在

小千谷東忠様(東平三郎様)

〔封筒裏〕

三月三十一日

40
〈1〉
洗心画会清規
(手書き)

洗心画会清規

- 一、趣旨
画道の実習より得る画禅三昧に悠遊する心境の鍛錬。同時
ニ美術鑑賞眼の向上をはかる。
- 二、指導
大亦觀風先生を中心として、毎月習作画の通信、指導を受

- 二、指導
大亦觀風先生を中心として、毎月習作画の通信、指導を受く。〔習作は本会に呈出ノモノニ、添作及、次ノ手本の為、同大の白紙一葉、一作二一葉ヲ必ず添へること。習作（手本、写生画（課題ノアル事アリ））〕

- 三、洗心会日 毎月一回（日夜）（会場はその都度通知）集合。添作を参考にする清書を持寄り比較研鑽すること（仮巻貼付ノ事）。所蔵の美術品を持寄ルもよし。又は写生会を催し、一日の写生行もする。

- 四、会費 円（茶菓・弁当・その他二当ツ。作品展覧会の折
のため準備金二も当ツ）

- 五、入会 希望者は会員の紹介を要す。男女を不問。必ず別紙名簿記載して出す事。

- 六、幹事 二名宛。会務一切の世話をする。
- 七、行事 春秋二回（或は随時）、東京大

春秋二回（或は随時）、東京大亦觀風先生の来越を乞ひ表装の上、会員作品展覧会を催し、講評、並ニ講演会、又は座談会を開催する。或は美術に對する疑問その他をきく。展覧会の作品に入賞を発表す。

昭和十七年四月三日

以上

洗心画会

小千谷町、
方

電話

40
〈2〉 洗心画会名簿案（印刷（グレーの文字）に書き込み）

昭和 年 月 日 主 旨 賛 同 入 会 仕 候

() 簿 名 会 悠 画						
費 会	要 摘	地 生 出	所 住 現		業 職	
年 芬 前 納 () 自 至 年 年 月 月 ()	趣味ト力希望	或は 右ト全ジ 県 郡 町	、 、 、 、 、		、 、 、 、 、 町役場員	
					氏名	
					、 、 、 、 、	
者 紹 介		年 生	話 電			
		才	勤 先	自 宅	印	
			番	番		

40 〈3〉 驪山画悠会清規（ガリ版刷、一九三六年一月）

驪山画遊会清規

- 一、趣旨 画を習ふといふよりも画禅三昧に悠遊する心境の鍛錬。
二、指導 観風画伯を中心として画技を錬る。又美術に対する疑問其他を聴く。

- 三、画遊日 毎月一回（第二日曜午后）に集合のこと。但、習画と自作

を必ず持寄る。或は所蔵美術品を持寄り研究することもよし。

- 四、画筵 太逸莊画房（觀風画伯画室）とする。
五、会費 月五拾銭

但、茶菓・弁当・通信費等に当つ。

- 六、入会希望者は会員の紹介を要す。

- 七、当番 二名づゝ。交替で会務一切の世話をする。

- 八、行事
会員の作品のみの展覧会、或は随時講演会等を開催する。

昭和十一年一月

驪山画悠会

目黒区中目黒三丁目九六〇

大亦方

40 (4) 驪山画悠会拡張主旨 (ガリ版刷、一九三八年八月)

驪山画悠会拡張主旨

驪山画悠会は素人同心の集まりで観風画伯を中心として忙中に画心悠々の清境を味得し、以て無上の醍醐味に浴するものであり、また同時にこの非常下銃後の精神鍛錬の修道であります。

わが大亦観風画伯は、従来個人展を作品発表の機関とし、孜孜精進回を重ねて居られますので、その独自の画境が如何に画壇の称讃を博して居るかは、別紙展覧会評抄によつても了解されること、存じます。

さて我々はこの数年来、画伯から全く犠牲的に画道の教へを受けて居りますが、此度その折角の御指導を一層有意義ならしめる為、従来の同心以外之を一般に広く開放して指導希望の方々、或は鑑賞家にもより多くの同好を迎へ、本会をして益々積極的なものとし、雑誌の刊行その他斯道の為に資しタイ考へから、今次の拡張の挙となつた訳であります。幸ひ此時を期し御入会を御勧誘する次第であります。

昭和十三年八月

驪山画悠会

会規

一、名称 本会は驪山画悠会と称す

一、目的 本会の目的次の如し

一、大亦観風画伯を中心として画心悠々の心境鍛錬

二、美術鑑賞眼の向上及び画道実習

三、機関誌『画心』の刊行、その他斯道の為に資す

一、会務 本会の事務所を東京市目黒区中目黒三ノ九六〇に置き会務は幹事之に当る

一、会員 本会々員は老若男女を不問一般同好者及び鑑賞家を以てす

一、会費 会員は会費一ヶ年金六円を前納するものとす

一、特典 一、会員に本会発行の美術鑑賞及趣味の手引となるべき雑誌『画心』を無料配布す

二、会員にして希望の者は観風画伯指導の下に画技を実習

することを得

三、同誌上に於て画技指導及美術上の質問に応ず

四、観風画伯に於て随時美術の講演に応ず

五、観風画伯個人展覧会に招待し『個展画集』を贈呈す

六、本会主催の講演会(年数回諸名士の講演)、座談会及展覧会に招待す

七、機関誌『画心』に会員の作品又は投稿を選択掲載す

一、会計報告 本会は毎年一回収支会計を『画心』誌上に発表す

驪山画悠会

右代表

渋谷鶴松

顧問

帝國芸術院会員
東京美術学校教授

建島大夢

大橋図書館長

坪谷善四郎

泰東書道院総務

豊道春海

豪洲プリズン大学教授 清田龍之助

「ミシン目」

第 号

証

一金 円也

今般驪山画悠会に御入会前納会費 年分正に受納仕候

昭和十年 月 日

目黒区中目黒三ノ九六〇

驪山画悠会

殿

代

印

「ミシン目、以下、画悠会名簿は略す」

41 五月一日付はがき

拝啓。御無沙汰申上居候。その後、御身体の方、如何候や。奥様にも御健かに御座候や伺上候。小千谷もいよく春と相成候事と存候。「洗心会」その後、御便りなく候が、やはり小生が在谷せず候ては熱も上らぬ事かと拝察いたし居候。例の御義理の「出品」、この様なものに御座候。之れより御心配いたゞき候作品、どんぐりかき可申候。又、次の個展の用意にもかゝり度候。五月頃、伊勢参詣の御由、御用意御忙しき事と存候。先ハ御

伺ひ旁々。奥様によりしく。

〔上段、消印「目黒 17. 5. 1」〕〔四月一日料金改正〕

越後小千谷町

東忠様

東平三郎様

東京市目黒区

中目黒三ノ九六〇

大亦観風

〔裏面〕



42 七月四日付

拝啓。此度は実に御芽出度存じます。^{〔おめでと〕}こんど応援演説は私の思ひ違ひから果し得ませんでした。最高で圧倒的大成功には、小生の喜び、之に過ぐるものはありません。下手な演説などなかった方がよかったとも思っています。何にしても全小千谷での圧倒的信望、之なる哉です。たゞ小生としてひそかに心配してゐるのは御身体〔具合〕の工合です。どうか切に御大切に願ひます。段々、無理をしなければならぬ事の忙しさに逢ひますから。此程は申上げなかったが、数日來の戦ひの為でせう、睡眠不足の為でせうか、

すこしやつれてゐた様ですが、今、どこも何ともありませんか。之だけは是非共、御自愛被下い。^{〔下さ〕}どんな抱負も希望も、身体が元ですから。奥様も御喜びだったでせうが、御疲れだったでせう。よろしく御大切に願ひます。今年は御令息が無事で帰還されたし、議員は圧倒的最高点、よいお祭が迎へられますね。こんどの委員の人々も御骨折りだったでせうが、小出様は全く御奮闘被下いましたね。

さて、帰りにお話の小出様への作品、二尺巾にタテ尺八の、越後の「闘牛の図」をお送り申上ります。こんどの記念に差し上げて下さい。これも色紙も、小生のこの度の御喜びのしるしですから、之については御心配下さらぬ様、御申添へ致します。

又、石坂氏の方、御懇配頂きまして難有く、厚く御礼申上ります。毎度、恐入ります。そのうち尺三（尺一ノモノも）にでも確定いたしましたら、御通知御願ひ申上ります。

高野様は御受取を書き御送りいたしました。さて、何時も帰京の時、御土産を賜りまして恐入ります。パンは只今は何よりでした。又珍しい御菓子、御礼の申し様もあります。奥様にもよろしく御申上げ下さい。

その後、御忙しいでせう。委員の慰勞の時でも、あの色紙をわけて下さいましたが、小出様のも一処にあればよかったのですがね。然し、闘牛の会心作、御高覧被下い。

さて、帰京しましてから、当地の画悠会の会員（幹事）に逢ひましたが、例の八月の湯沢行が話に出ました。八月の八日の土曜日と九日の日曜日とをかけて、一泊の予定で行き度く、夏のことだから今から話しておかなければと思ふのですが、私の方から申込んでいゝのですが、貴家からの方が尚、便宜を計って呉れるかと思ひますが、御電話でも御話しおき願へませんか。その後、私の方から手紙をでも出します。多分行く人は五、六人位しか行かないだらうと思ひますが。八日の朝つくか、八日の昼つくかして一泊、翌日、夜行で（三等で）帰京だと会費十五円では上りませんね。それ位の処で通知をしたいと思ひますが。然し、八日、九日になると小千谷の方は盆の事で忙しくて参加してもらへませんね。九日に一寸顔を出してもらへるだけでもいいのですが。出来れば桜木氏、その他、松月・照専寺さんも出てくれ、ばと思ひますが。行く人々に余り酒の飲む人はありませんが（少しはいけるかと思ひますが、一本位の処でせう）。この月のお祭りの時だと有名な祭を見せられるのですが、それには都合のつかぬ人も

多いし、私も旅行だし、残念です。右の交歓会の事、御序^{「おついで」}で御返事頂ければ幸いです。

先ハ不取敢、帰京後挨拶まで。草々。

七月四日

大亦観風

東平三郎様 侍史

〔封筒、消印判読不能〕

越後小千谷町

東忠

東平三郎様 侍史

〔封筒裏〕

七月四日

43 七月三一日付

拝啓。その後御無沙汰いたしました。先達御案内の様な展覧会を和か山商工会ギ所のすゝめにより催しまして、漸く帰京しました。和か山も大阪も非常に熱く、全く弱りました。病気になる程、暑くて閉口しました。

さて、帰京すると色々の用事が待ちかまへてゐて又、多忙。そこへ画悠会の幹事さんが見えて相談で、別紙のやうな八月八日、九日の湯沢行の印刷物をおいて行ってくれました。お目にかけます。こんどは家内も行く事になりましたが、湯沢でお目にかゝります。急用でも出来ない限り参るつもりです。どうかよろしく御願ひ申上ます。

さて、作品の方も、出来るだけ持参致しますが、とても沢山は出来ませんが、描けるだけ描いて持参いたします。松月の例の方の分、よろしく御願ひ申上ます。小船井様のは持参するつもりで居ります。こんどは長男をつれて行かうと思ひます。姉の方はこの間から女学校で海へ行つて来たので留守居に廻すつもりです。姪が家にゐるのですが、昼は学校の講習があるので不在になるので、オボツカない子供に留守居をさせるので、すぐ引返さなければならぬ事と思つて居ります。会員も交歓会を楽しんでゐる様です。そちらからも、出来るだけ多勢、会員がお出で下されば何よりです。何卒よろしく願上ます。では不取敢^{「ふとりあやまらず」}。草々。

奥様によりしく願上ます。

大亦観風

三十一日

東平三郎様 侍史

洗心会の名簿はまだ出来ませんか。結成会を催しましたか。まだでしたら湯沢でやつてもよろしいと思ひますね。好い機会ですから。

〔封筒、消印「17. 7. 31」〕

越後小千谷町古町

東忠

東平三郎様 侍史

〔封筒裏〕

七月三十一日

44 画悠会湯沢旅行予告状(ガリ版刷)

画悠会の皆様

拝啓。暑さの砌、お障りも御座いませんか、御伺ひ申上げます。

さて、我が画悠会ではかねてから会員打揃つて一泊旅行を試みたいと存じて居りましたが、此の度、次の様に実行したいと存じます。

皆様にはどうぞ今から都合をおつけ置き下され、是非御参加下され度、御願ひ申上げます。

日時 八月八日(土)から九日(日)にかけて一泊

御都合のつく方は八月七日夜行列車で出発、其の他は八月

八日午後出発

上越線、越後湯沢温泉(上野駅より準急四時間余)

高半旅館(デンワ湯沢九番)、大亦先生の御定宿です

源平時代からの旧家、塩類泉、無色透明、湯量豊富

神経系・胃腸・婦人科・諸病に特効、内湯二露天風呂あり

山の湯には老鷲のこだま絶えず、谷間の風は白百合の薫りを送り、翠巒の間に三国岳を望む、宿は魚野川の清流を下に清涼、膚に粟を生ずる程です。名勝不動の滝も暑さを忘れしめ、下り鮎は目下豊漁です。

旅館の若主人は東京で教育を受けた人、絵に興味を持っています。

なほ越後小千谷町の東忠さんが洗心会といふ会を作って大亦先生の通信指導を受ける筈になつてゐるのですが、この際、この方々と御一しよに楽しみを偲々したいと申し送りました処、大いに喜んで、早速、二、三名参加したいと申して来しました。お互に落合つて顔を知り、言葉を交はすのはよいことと信じます。

出発の時刻、他の日程などはもう少し先へ行つてお知らせ申します。

旅行費 宿泊料六円、昼食料二円、往復汽車賃六円余

計、大体十五、六円の見込（一部は会から負担したし）

参加の見込

八月は旅館が忙しいので、早くに返事を出し、申込みをする必要上、すみませんが、御参加の見込有無、すぐに御返事下さい。御家族御同伴歓迎いたします。

二伸、七月は大亦先生が和歌山で展らん会、其他で御旅行につき例会は取りやめます。

画悠会幹事 岩村博・窪田宇佐美

45 七月三〇日付画悠会湯沢旅行案内状（ガリ版刷）

拝啓。毎日きびしい暑さつゞきですが、皆様御障りもなく洵によるこぼしく存じ上げます。

此の度、湯沢温泉に旅をいたすことにしました処、早速皆様の御賛成に預り、有難く存じます。さぞ賑やかに愉快な清遊の出来まことと思ひます。参加者八十一名です。

大亦先生・令夫人・全令息、渋谷様・令夫人

伊藤様、垣上様、中川様、阿部様、岩村、窪田

出発 八月七日（金）夜行の終列車にしていたゞきます

集合 八月七日午後九時三十分から全十時までの間に上野駅の改

札口附近

切符 各自お求めを願ひます。省線のどこからでも料金は同じです。上野で買はないで、お近い所でお求め下さい。

料金 参円九十銭。行先は上越線越後湯沢。

改札 この頃の夜行列車は何れも一時間から一時間半位前から改

札に行列してゐないとまとまつて良い席を占めることが出来ませんから、少し御辛棒下さい。

発車 午後十一時三十分（新潟行列車）

翌朝五時十五分、湯沢駅着

朝食 軽い朝食として各自におにぎりを持ってゆくこと

会費 行きの乗車賃を除いて、少し余分に見積つて

大人一人 金五拾円位を御用意願ひます。

かゝりまただけを帰りにいたゞきます。

高半旅館では良い部屋を明けて待つてゐるとの事です。

小千谷町の東平三郎様も先日、お出になつてよくお話おき下さいました。東様の洗心会も数名の方が御来会下さり、高半の若主人や土地の方もどなたか夕飯を共にして下さるらしい御様子です。八日、九日のプログラムは先方へ参りましてから、共にした方がいゝものは申し上げます。

それでは、魚野川の清流の涼味と新鮮な鮎の香りに親しめますまで、どうぞ寝冷など遊ばさぬ様、お祈り申します。

上野駅でおめにかかります。さよなら。

七月三十日

大亦先生 様

画悠会幹事 岩村博・窪田宇佐美

46 八月五日付

拝復。御親切なる御手紙拝見、難有存じます。^{「ありがと」}御注意の数々、会員諸君にも申伝へておきます。

さて、只今、毎日早朝に起き、画室にとどこもり、一生懸命にやつて居ります。七日までには、全部出来上らせる覚悟です。始めは危んでゐましたが、全部やれさうの見込です。この前に御配慮いただいたもの、うち、未作のものを書き出して見ますと、

1 片山氏 尺一 軍鶏

これは始めにかきましたが、三枚目に相当気に入ったものが出来ました。

2 稲本旅館 尺一

3 上 中村實氏 尺五、絹本 万葉

これも同時にやりかけました。絹を送つてもらつてゐると何時のことかわからないので。箱書、表具は別に、又希望があつたらのこと、して。画が「小倉山」をかき、舒明天皇の御製をかきました。「万葉画撰」中の画と同じです。

相当会心作のつもりであります。

4 照専寺様 尺一 春景山水
〔笠松〕
八松様 ツイ立、ヨコ一尺六寸五分、タテ尺五

之も相当の事に出来さうです。題は「瞰光」とでもします。朝日に松、朝鳥が飛んでゐる図です。

6 高野様 色紙 子供の夏宵、笛吹ノ図
尺三巾 甲虫 ヨコ

7 小舩井様 尺巾 山水図

之も昨日、三枚目に気に入ったものが出来ました。先きのは遠山が濃すぎた為、止めました。之は「富士川下り」です。これで皆と思ひます。今日も之からかきます。後の石坂氏のは大きさ未定の為、後廻しにする予定です。上新さんのは受領書（貳百円の）を持参しやうと思ひますが、よろしく御願申上ます。

此度の一泊旅行については、種々御心配を頂き、何より難有、厚く御礼申上ます。旅館の待遇よりも洗心会の諸氏との交歓が何より幸せです。こちらの会員も大喜びすること、期待致して居ります。

又、家内・子供への御招き難有、厚く御礼申上ます。私は前便申上ました様に、子供一人での留守番で、心元ないのですが帰り度思ひますが。家内は大喜びですが、若しかすると同行の者の関係上、伺へないかとも存じますが、ご配慮の程、厚く御礼申上ます。

先は不取敢、御礼まで。奥様に何卒よろしく御願申上ます。

此の御手紙、七日までに到着しませんでしたら、すみませんが奥様でも湯沢まで御持参を願ひ上ます。

八月五日

大亦観風

東平三郎様

〔封筒、消印「目黒□□ 17・8・5」「新潟小千谷 17・8・6」〕

越後小千谷町

東忠

東平三郎様 侍史

速達

〔封筒裏〕

八月五日朝十時半

47 〈1〉 八月六日付小千谷表勇領収書

記 拾八円 表具 一

八月六日 小千谷 表勇

上

47 〈2〉 八月七日付東忠宛て長岡吉岡房吉領収書

八月七日 一金拾五円也 中品桐櫃、長サ貳尺九寸掛物箱

蓋板 参枚

同 貳尺壹寸 壹枚

×四枚 (一枚四〇〇、一枚三〇〇)

合計、金拾五円也

右之通り 候也

昭和十七年八月七日

筆筒指物、桐丸刷火鉢、自製販売

御婚儀具一式 房 吉岡房吉

長岡市坂下町

電話一、六六三番

小千谷

東忠様

48 二二日付（八月か）

拝啓。此度は又、大変御厄介をおかけ致しました。毎度御伺ひすると御多用の処を御迷惑をかけまして何とも相すみません。厚く御礼申上ます。又夜更けにもか、はらず、御二人にて御送りを頂きまして何とも御礼の申様ありません。松月さんにもお氣の毒でした。何れ御礼状は出しますが、来ました時、喜んでゐたことを御伝へ被下さい。又、いろ／＼御土産を頂きまして難有存じます。帰ってみると、家内がもう出発してゐたので、

御土産を見せてあれこれと御親切頂いた事を話さうと思ったのに、一寸張合ひがなかった次第ですが、然し出かけてくれてゐたので安心もしました。それで今日、又、姪がそこへ行くので、頂いた御菓子や梨をもたせてやります。大喜びすること、思ひます。

この度は思ひがけない湯沢の一泊は実に愉快な印象が残りました。大層御散財をかけた事を恐縮に存じます。厚く御礼申上ます。山本様といひ、松月君といひ、実に面白かった。松月君は、死んだお父さんよりは明るい気持で付合へさうですね。ハウスの方も松月君がゐたので尚賑やかで面白かったです。どうも度々御厄介をおかけ致しました。殊に前の晩は又、皆様を御招きして頂いて、之も久々一夕の歓を得ましたが、難有厚く御礼申上ます。又、山本様、松月の方も御配慮、何時もながら御礼の申上様もありません。よいものをかいてお目にかけますから、どうかよろしく御伝へください。

さてハウスで御話申上ました接合剤のこと、帰京翌日、早速買ひに参りました。まあ、き、めがあるかどうか試して見て下さい。よろしければ、又御通知被下^{くだされ}は、御送り申上ます。只今、同剤は別に御送り致しましたから、御受納被下^{くだされ}い。使用方法は印刷物を御覧被下^{くだされ}は、出来ませう。但し念入りにゆつくりかまへて接がないといけないと思ひます。セトモノ・ガラスは両面へヌリ、一寸ウス乾キまでおいて、接合がよいとの事。スグ合スとハミ出しますからキ、メが少いよし。二十四時間以上おいておく事です。東京では焼つぎ一つでも五十銭以上かゝります事から考へて見ると、この一びんで幾つも出来るし、たとへ半年しかもたぬと考へても安いものです。結果がよかつたら又御送り申上ます。何にしても自分で出来るのが又、面白いです。

何れ又、御便り申上ますが、先は不取敢御礼^{とりあえず}まで。奥様にもわけてよろしく御申上被下^{くだされ}い。

二十二日

東平三郎様 侍史

大亦観風

49 九月二七日付

拝啓。其後御無沙汰いたし居候。九月に入りてよりも随分暑さがきびしく候ひしも余程よく相成候。その後御便り頂かず候が、御健康如何候にや御案申上居候。御丈夫に候や。この月、親戚に不幸など有之、取込ミ居候う

ちに日もたち候事とて、のぼし居候用事などにて多忙いたし居候。

此の夏は非常に御厄介相かけ候がこの二十日、例の画悠会開催の節、湯沢の思出話を語り申候。皆々御厄介に相成候事を口々に感謝いたし居候。その節相伺ひ候にては御令息様はこの十月頃より御出社の様に御座候が何日頃御上京に候や。又、お目にかゝる機会を相たのしみ居候。若し十月二十日過ぎにも御座候は、御序^{おついで}で展覧会も見て頂き度と存居候。之は小生の個展では御座なく候が、小生も出品する会にて「南宗名家展」(大東南宗院展覧会とは別に御座候)といふのを東横デパートにて開催、期日は十月二十四日―十一月一日まで、に御座候。翠雲先生、田中咄哉、矢野橋村(大阪)、矢野鉄山、池田遥邨(京都)(本年の帝展審査員)、橋田永芳、田岡春径(特選になりし連中)、小川千甕、小林巢居、田中案山子、茨木杉風(元美術院の連中)、河野通勢、河野秋邨、水田硯山、水田竹圃(三人は京都、帝展無鑑査の連中)、水越松南(元南画院同人)直原放青(大阪)、平野長彦(大阪)、以上十九人と小生を加へて二十人。全部が南画院の委員にて御座候。これより横物二尺位のを製作する予定にて、来月十日までに二、三点かき度と考へ居候。大体として面白き個性のある作家が集り居候が、硯山・竹圃などは最早過去の人かと存候が、一つ腕をみがいてこの連中よりもよきものをかき度と覚悟いたし居候。扱て先達御送申上候作品、御入手被下^{くだされ}候事と存候が、如何にや。又御厄介願申上候。小出の上新様の方、結果如何に御座候や。何卒よろしく御願申上候。石坂氏も御見えなく候が、御序でよろしく之亦願上候。

其後御内室様にも御無沙汰申上居候が、何時も御健勝の事と拝察申上居候。何卒よろしく御申伝へ被下^{くだされ}度候。少時御無沙汰いたし居候為、御機嫌御伺ひまで申上候。

九月二十七日

草々不一

大亦観風

東平三郎様 侍史

50 一〇月三十一日付はがき

秋も深く相成候。此程御地斎藤様夫人見えられ、御令妹ケイコの事、依頼され候。明日より始め可申候。

伺ひ候はゞ、一生懸命かゝれ居候由。余り夜フカシされぬ様願上候。さぞ上達され候事と存候。今秋(展ラン)出来候や。他の諸君も如何。

このハガキは「名家展」の出品作二尺巾の小品に御座候。二日目に六百円で売れ申候。今一作も売約有之候。展覧会の名前が立派な為に候にや。尤も小生以外の人は有名人に候。奥様よろしく。

〔上段、消印「目黒 17・10・31」〕

越後小千谷町

東忠

東平三郎様

東京市目黒区
中目黒三ノ九六〇

大亦観風

三十一日



〔裏面〕

51 一月二三日付はがき

その後、失礼仕候。この十六日、急に翠雲先生の後をおひて京都二参り、高雄・嵐山の紅葉を賞し申候。関東の紅葉よりは又一人の美しさに御座候。二十一日帰京仕候。奥様よろしく願上候。

〔上段、消印「目黒 17・11・23」〕

越後小千谷町

東忠

東平三郎様

東京市目黒区中目黒三ノ九六〇

大亦観風

52 一二月二七日付

拝復。此程は大層立派な鮭を御惠贈下さいまして難有存じました。早速御礼状を差上げやうと思つてゐる処へ本日、御手紙を頂きました。冬の御便りを喜んで拝見致しました。鮭はお正月に何よりの御贈者、家内も大喜びして居ります。今、物資の少い折からと何よりの事です。難有く御厚情感謝致して居ります。送つて下さるのに随分骨を折つて下さった御様子、御礼の申様もありません。あの立派な箱を作らせるだけでも、今の事ですから大変だつたでせうと感激して居ります。毎度頂戴いたす許りで私方からは失礼ばかりです。御許し被下い。御手紙で拝見するといよく御壮健の御由、何より芽出度、御慶び致して居ります。

扱て、上新氏の件、大変御迷惑をおかけしてしまつた様で相すみません。作品を貴家の方で御引取り頂いたのでは、實に御迷惑を御かけしました事と恐縮して居ります。殊にいろいろ御手数をして頂いて、その上、御取り頂いたのでは、相すまぬ事に存じます。御同封頂きました小切手金貳百円も、本来頂くべきではないのですが、折角の御厚意、難有拝受致しましたが、実に恐縮の外ありません。又、石坂氏のも度々御配慮頂いてゐる様で之亦厚く御礼申上ます。次に御紹介の斎藤さん他二人の婦人の方、月に三回づ、画悠会とは別にやつて居ります。益子さんは月末帰るさうですが、竹のかき工合を一度見て下さい。どれだけになったか。まだ何にしても一ヶ月余だから、遙かに貴家の方が先達ですが。御手紙の画筆二本宛(大小)七人分は明日買つて来ます。御上京の時に間に合う様に致しませう。

一月早々に御来宅被下御由、是非御待ちして居ります。こんどは宿などへは行かないで直接お出で下さい。何日頃になりますか、二日ですか、三日ですか。一寸電報でお知らせ下さい。時間もわかれれば非常に結構です。御一処〔一緒〕に御伴して御令息のお出でになる処へ御訪問したらくとも思ひます。一月は宿が満員かもしれませんが熱海へでも御一処致したいと思ひます。では不取敢〔とりあえず〕、御礼旁々返事まで。草々。

奥様にわけてよろしく御申上被下い。家内からもわけてよろしく御礼を申上げて下さいと申し出ました。

それでは速達のはがきか電報でも御上京の日時をお知らせ願上ます。

十二月廿七日

東平三郎様 侍史

大亦観風

〔封筒、消印「目黒 17・12・27」〕

越後小千谷町

東忠

東平三郎様 侍史

〔封筒裏〕

十二月廿七日